



Title	インド農民運動指導者の描く世界像と地域像：ラーダーバッラブ・アグラワールの農民集会演説(1946)
Author(s)	桑島, 昭
Citation	大阪外国語大学アジア学論叢. 1993, 3, p. 151-184
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99663
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

インド農民運動指導者の描く世界像と地域像 —ラーダーバッラブ・アグラワールの農民集会演説（1946）—

桑 島 昭

ここに紹介するのは、1946年にインドのラージャスターにおいてジャイプル藩王国農民組合（Jaipur Rajya Kisan Sabha）が成立した際にラーダーバッラブ・アグラワールが農民集会で行った議長演説である。⁽¹⁾

1930年代の後半にラージャスターの「人民会議」運動に加わり、その後長期にわたって農民運動の指導者であったラーダーバッラブ・アグラワールについては、全インド農民組合（All-India Kisan Sabha）の創立時（1936）から1973年までの歴史を描いたラスールの書物のなかに一箇所だけ彼の名が登場する。⁽²⁾ 1951年8月にカルカッタで開かれた中央農民委員会の会合にアグラワールはラージャスターの代表として招かれて出席した。この頃、インド独立後の農民運動は、インド共産党の指導する農民武装の路線とインド政府の厳しい弾圧を経て、再編成の時期にさしかかっていた。

インドにおいて、第二次世界大戦の終結から1950年代初めにかけては、独立運動の最終段階を経てインド・パキスタンの分離独立（1947）、インド憲法の施行（1950）から第一回総選挙の実施にいたる新しい国家の基礎が据えられる時期に当たり、その過程でインド国民会議派は、ヒンドゥー、ムスリム、シクを巻きこむコミニナル暴動、パキスタンとの戦争、インドへの統合に抵抗し、あるいはこれに条件を付ける藩王国支配層の思惑、インド共産党の指導する農民の武装闘争など様々な状況を処理しながら、全国的な支配を確立していった。

ここで取り上げるラージャスター、あるいはラージプターナーにおいても、22の藩王国と英領インドの一部であったアジュメール・メールワーラーを統合した単一の州の誕生への過程には多くの曲折があった。⁽³⁾ ジャイプル藩王国では、第二次世界大戦中、藩王は「憲政改革」を約束することによって「インドを立ち

「去れ」運動（1942）の攻撃対象となることを免れたが、逆にそのことによって「改革」はあまり進まなかった。⁽⁴⁾ 1945年に発足した両院への選挙で、人民会議は51名から成る上院で3名、125名から成る下院でも27名の議員を送るにとどまった。⁽⁵⁾ 1946年5月に至って、人民会議議長のデービーシャンカル・ティワーリーが藩王国政府の閣僚に迎えられたが、政治経歴の浅い彼の入閣には、1930年代のジャイプルの農民運動の拠点であったシェーカーワーティーの農民のあいだに不満があったといわれている。⁽⁶⁾ その後、1947年3月に、ジャイプルの人民会議運動の指導者ヒーラーラール・シャーストリーが「筆頭大臣」の地位を得た。しかし、藩王の下にはこれとは別に「宰相」^{（ティワーン）}の制度が依然として維持されていた。

また、インド独立後の1948年6月26日、ラージプターナー州会議派委員会が各地の人民会議組織を吸収する形で成立した。だが、ジャイプル、ジョードプル、ビーカーネール、ジャイサルメールの4つの有力な藩王国を加えて大ラージャスター連合がジャイプルを行政上の中心として誕生したのは、1949年3月30日のことである。なお、シローヒー藩王国のアーブー山などの地域とアジュメール・メールワーラーを含めて現在の形のラージャスター州が生まれたのは、1956年11月1日である。⁽⁷⁾ 言語別州再編成の原則が確認された1956年という年は、独立後の政治的・行政的枠組みが形を整えた年であった。

1

第二次世界大戦後の1940年代後半の変転の時期を、インドの地域の民衆はどのように見つめ、どのように行動していたか。アグラワールの議長演説は1946年半ばの段階におけるインドの一地域の農民運動と農民指導者の世界像と地域像を映し出している。この演説はたしかに政治的檄文の色彩を持っているが、彼の手記に比べると大戦直後のインドの一地域の時代感覚が率直に表現されている。

まず注目すべきことは、藩王国における責任政府の樹立を目指して1937年に再編成され（成立は1931年）、1938年にガンディー主義的資本家といわれたジャムナーラール・バジャージを議長として第一回大会を開いたジャイプル人民会議にたいするアグラワールの評価が厳しいことである。手記においてはバジャージに

たいする敬愛の念を通して人民会議の活動を回顧していたが、この演説では、新たに生まれようとするジャイプル藩王国農民組合の視点で歴史を見つめているため、「農民を指導する権利が人民会議の手中に入ったことによって、10年間、農民は前に進めなかつた」という見解すら示されている。

ところで、1930年代前半のシーカル、シェーカーワーティーを中心とするジャイプル藩王国の農民運動が、地主層であるジャーギールダール（ティカーネーダール）による様々な賦課や強制労働の廃止などを求める運動というだけでなく、その過程でラージプートの支配に抵抗するジャート農民の全面的な地位向上の運動という社会的な側面を持っていたことは、アグラワールの手記からもうかがうことができる。U.P.州のアリーガルにある全インド・ジャート会議やパンジャーブの連合党指導者チョートゥー・ラームのようなカースト組織、そしてジャート農民の指導者もこの地域の農民運動を支援していたのである。⁽⁸⁾ 1937年のジャイプル人民会議の再編成、あるいは実質的な成立は、このような農民運動を都市の運動と結合させ、農民指導者に藩王国行政への参加の意志を強めさせると同時に、藩王国における責任政府の樹立を目指す全インド的な民族運動の一部として農民運動を吸収する契機ともなった。⁽⁹⁾ それは、会議派の藩王国内政へのこれまでの不介入方針の転換、それに伴うハイダラーバード藩王国会議、マイソール藩王国会議、トラーバンコール藩王国会議の誕生（1938）などに連動する動きであった。

しかし、アグラワールは、1939年のジャイプル・サティヤーグラハを成功させ、市民的自由の獲得に決定的な役割を果たしたのは農民であるとしながらも、1937年以降、農民は自己の権利の獲得においてはほとんど前進できなかつたとのべている。この期間、とくに土地査定のあったシェーカーワーティーでは、新しい査定に伴い土地記録税を除くほとんどすべての賦課が公式には廃止されたが、ティカーネーダールは新しい地代の率に反対し、小ジャーギールダールの抵抗もまた執拗であった。アグラワールが演説のなかで小ジャーギールダールにたいし時代に対応して生きるように訴えているのも、この点にかかわっている。この間、藩王国政府は農民に同情するような態度を示しながらもしばしば後退を余儀なくされ、1946年には農民の不満は小作料不払運動を開始するまでになっていた。

アグラワールの人民会議批判は、この組織がこれほどまでに深刻になった農民

運動を指導することができないことに由来していた。しかも、ジャイプル人民会議の指導者が1人、2人と藩王国政府に閣僚として迎えられていく状況がこれに重なっていた。アグラワールの視野が拡大するのはまさにこのような現実の認識を通してである。これまでシーカル、シェーカーワーティーのジャート農民の運動を視野の中心に据えてきた彼は、英領インドの州政府の閣僚や州議会議員が從来から特権を維持してきたカーストによって占められている事実を見定めながら、19世紀末からの強力な農民運動の伝統を持つメーワール（ウダイプル）のビール、そしておなじく部族民のミーナーの窮境、あるいは農業労働者の問題が誰によつても取り上げられることのなかった重大さにいまや考えを馳せるようになっていた。1946年という時点で、彼はジャイプル藩王国農民組合の当面の課題を「すべてのジャーティー（カースト、部族）の農民を結集すること」にあるとし、とくにジャーギールダール層を形成するラージプートにたいしては「偉大な戦士の理想」に従つて範を示すようにと訴えていたが、すでに今後の農民運動の方向が意識されていたのである。

2

ラーダーバッラブ・アグラワールがこの農民集会の議長演説をしたとき、彼はジャイプル労働党書記長を名のつていた。ジャイプル労働党はラージャスターにおけるインド共産党の前身とみられる。しかし、彼の演説内容には当時のインド共産党の公式見解をはみ出している部分があり、そこに晩年に至るまで変わることのなかった彼の個性的な発想がのぞかれる。アグラワールはインド独立について次のように発言している。

「イギリス支配者はインドを去つて行くだろう。インドの多くの政党の不満は、イギリスが眞の独立と言えない状態でインドを去るのではないかということである。

しかし、私にとって不思議なのは、何故インド人の心にこのような疑いや怖れがあるのかである。外国権力が自分の荷物を仕末してこの国から出て行くのに、これ以上の何を彼らに求めるのか。」

「単なる政治的独立だけでは社会的病弊を癒すことはできない」と付け加えながらも、政治的独立についてのアグラワールの予測は楽観的である。その基礎には、「20年前からインドの独立を要求してきた」イギリス労働党にたいする信頼—このこと自体インド共産党の批判的な視点と異なるが—があったが、それ以上に第二次世界大戦でファシズムに勝利する原動力であったとするイギリスの「労働者と農民」の力にたいするアグラワールの確信があった。反ファシズムの勝利から来る世界史の未来への楽観は1946年半ば頃までインドの多数の人達をとらえており、アグラワールの世界像にも深く刻みこまれていたのである。また、1946年3月にインドを訪れた閣僚使節団とインド側指導者との独立交渉の決裂ののち起こったコミュナル暴動の濃い影は、未だインドに現われていなかった。最初に大きな衝撃を与えたカルカッタ大虐殺が起こったのは、1946年8月16日である。

同時に、この演説においてインド全域に共通する問題についての言及が少ないので、地域的農民組織の結成にかかわる集会であったことにもまして、藩王国内の農民がインド独立前夜に苦しんでいた問題がいかに深刻かつ複雑であったかを示すものであろう。彼らは、「半ば独立状態」⁽¹⁰⁾で独自の行政・警察権を行使してきた大ティカーネーダールによる圧迫だけでなく、「農民の支配」を怖れる数多くの小ジャーギールダールの頑強な抵抗にも立ち向かわなければならなかつた。この状況はジャイプル人民会議とは別の農民組合の結成を必至としたが、同組織が隣接の藩王国の農民運動と連携し合い、全インド農民組合の活動に合流するには時間を必要としたのである。1936年における全インド農民組合の成立について語るとき、インドの面積の40%を占める藩王国が未だ包摶されていなかったことに注意しなければならない。その意味では、大戦後のハイダラーバード藩王国のテレンガーナー地方の農民蜂起は、もう一つの「藩王国統合の歴史」を担つていた。

すでに触れたように、1946年段階のアグラワールの描く世界像はきわめて明るく、世界は社会主义の方向に向かいつつあるととらえていた。この考えは、反ファ

シズムの闘いを勝利に導いたのは世界の「農民と労働者」（＝「働く者」）であるという理解の延長上に置かれている。他方でジャイプル農民の困難が厳しければ厳しいほど、ロシア観はゆるやかになり、「ロシアでは100人中100人にとって天国である」という結論も引き出されている。ロシアを見る眼と藩王国農民を見つめる視点が深くかかわりあっていることは、1939年のジャイプル・サティヤーグラハを経験したアグラワールが、「書き、考えを表わし、農民と労働者の結社を作る自由」の要求という角度からロシアの現実を読み取ろう、あるいはむしろ読みこもうとしていたことからも想像できよう。

1917年の革命以後のロシア史は、いくつかのうねりにおいてインドの多くの人達の関心を引き寄せた。ロシア革命の成果は「農民・労働者の統治（Kisan Mazdoor Raj）」としてとらえられ、インドとおなじように貧しく字の読めないロシアの農民がどのように変わらのかに切実な関心が寄せられた。その後、1928年に始まったソ連の第一次五ヵ年計画に際しては、みずから経済計画を立てることのできない植民地インドの現実を通して明日のインドがそこに重ね合わされた。第二次世界大戦期のインドでは、第一次大戦期の苦い経験から、インドは独立してこそ反ファシズムの闘いにおいてイギリスを含む連合国に協力しうるという考えが基調となつたが、そこにおいても苦難の中国とソ連の人民にたいする同情と共感という流れは変わることなく存在していた。アグラワールのロシア観は、彼がコミュニストであったというだけでなく、このようなロシア像の積み重ねのうえに、とくに大戦におけるロシアの勝利によって形成されたものであろう。我々がユートピアとしての社会主义について語るとき、近代西欧のサン・シモンやオーウェンから出発すると同時に、インド、あるいはアジアの民衆と指導者が自己を取り巻く現実を通して革命後のロシアに、そして同時代の中国に何を読みこもうとしたのかをも検証する必要があろう。⁽¹¹⁾

もちろん、アグラワールのロシア観が、地域組織の側から出される唯一のものではなかった。すでに、インドでは1930年代末からソ連の内政とともにその対外政策、とくに独ソ不可侵条約、ポーランド進駐からソ連・フィンランド戦争にいたる過程が厳しい批判にさらされていた。このような背景のもとで、1946年4月に開かれたジャイプル藩王国人民会議第8回大会において、議長ラードゥーラー

ム・ジョーシーは、「我々の闘いの唯一の武器は非暴力。…我が国の唯一の指導者はマハートマ・ガンディー、独立のために闘う唯一の組織は会議派」というスローガンを掲げることによってインド共産党を暗に批判し、あわせてソ連外交を非難した。⁽¹²⁾

「ロシアの成長を人々は希望と信頼を以て見つめてきたが、いまや世界は怖れと憂慮を以て見始めている。ロシアの外交政策がツァー・ロシアの外交政策を探りつつあることがわかったからである。真に驚くべきことは、偉大なロシア革命のうちにレーニンとトロッキーが建設したそのロシアが帝国主義的になったことである。」

ラードウーラーム・ジョーシーの演説は、1942年のインドの反英大衆運動をファシズム勢力をまえにしてのサボタージュ活動としてとらえてこれに参加しなかつたために1945年末に会議派から追放されたインド共産党への批判と、大戦後のソ連の対ヨーロッパ政策への批判とを結び合わせている。農民運動にもかかわってきたジャイプル人民会議の演壇からのこのようなコミュニケーション批判もまた、アグラワールをジャイプル藩王国農民組合の結成に加わらせる一因となっていた。1946年は、インド共産党が1942年7月の合法化以来採ってきた「民族の統一」の路線、具体的にはインド国民会議派と全インド・ムスリム連盟の統一を基礎とする「民族政府」樹立の要求を見直さざるをえない年でもあった。

このように見ると、アグラワール演説はラードウーラーム発言にたいする彼の解答であったといえよう。第二次世界大戦を契機として一人の地域的な運動の指導者の視野がヨーロッパからロシア、中国、アメリカにまで拡がったこと、他方で彼の眼がのちに彼自身農民のあいだの「一種の上層中産階級」⁽¹³⁾と理解したジャート農民だけでなく、部族民ビールやミーナー、農民労働者にまで注がれていたことを、演説はよく伝えている。しかし、ラージャスタン農民の生活が彼らの日常的なジャーティー意識にまで立ち入って語られているのにたいし、その対極にあるロシア観は、天国論に見られるごとく、1920年代と比べると固定的である。ここには、1946年という段階において世界が、そしてインドの大衆運動が同時代のロシアについて持ちえた認識の制約があらわれている。この点では、アグラワールの描く中国像は限られた、そしてよく知られた情報源を基礎としてい

るとはいえるが、はるかに農民にとって身近に感じられる。そして、農民指導者が描く完結したロシア像よりも、動いている中国の現実の方がインドの農民の心に触れるものがあったと推測される。1946年には、大戦期の中国に派遣されたインドの医療使節団を題材としたヒンディー語の映画『不滅のコートニス医師の物語』も制作されている。¹⁴⁾当時はまだ、中国革命の道がアジア・アフリカ人民の進むべき唯一の道といわれる以前であった。

ラーダーバッラブ・アグラワールの農民集会における演説は、インドの一農民指導者の地域像と世界像を通して、第二次世界大戦直後の時代を独自の明るさと陰影を以て描き出している。

「註」

(1) テキストは

Ringas Kisan Sammelan, Aasarth Sud 1, 2003, Sabhapati Shri Radhavallabh ka Abhibhashan

である。なお、アグラワールについては、彼の手記を紹介する形で以下の文章で触れている。

拙稿 [インド・ジャイプル藩王国の統合と人民会議運動－農民運動指導者ラーダーバッラブ・アグラワールの回顧に寄せて－] 『現代アジア政治における地域と民衆』所収、1983年、及び 同続編『現代アジアにおける地域政治の諸相』所収、1984年、ともに大阪外国语大学アジア研究会刊（本稿では、それぞれ I, IIとする）。

(2) M. A. Rasul, *A History of the All India Kisan Sabha*, Calcutta, 1974, p. 151.

(3) V. P. Menon, *The Story of the Integration of the Indian States*, Bombay, 1961, pp. 238-260.

(4) この問題に関するジャイプル人民会議議長ヒーラーラール・シャーストリーの解釈は、彼の自伝に詳しく語られている。

Hiralal Shastri, *Pratyaksh Jivan Shastra*, Jaipur, 1970, pp. 70-73.

(5) M. S. Jain, *Adhnik Rajasthan ka Itihas*, Jaipur, 1988, pp. 361-362.

- (6) II, p. 162.
- (7) B. L. Pangariya, *Rajasthan men Swatantrata Sangram*, Jaipur, 1985, pp. 120-121.
- (8) Pema Ram, *Agrarian Movement in Rajasthan, 1913-1947 A.D.*, Jaipur, 1986, p. 152f.
- (9) Richard Sisson, *The Congress Party in Rajasthan-Political Integration and Institution-Building in an Indian State*, Delhi, 1972, p. 89.
- (10) Ram, *op. cit.*, p. 5.
- (11) 和田春樹 『歴史としての社会主義』 岩波新書 1992年。
- (12) *Jaipur Rajya Praja Mandal, Ashtam Varshik Adhiveshan, Kishangarh-Renwal, April, 1946, Sabhapati Pandit Laduram Joshi ka Bhashan*, Jaipur Rajya Praja Mandal Records, Rajasthan State Archives, Bikaner.
- (13) I, p. 207.
- (14) Dileep Padgaonkar (ed.), *Flash Back - Cinema in the Times of India - The Times of India Sesquicentennial*, 1990, p. 158.

資料

ジャイプル藩王国農民集会議長演説

ラーダーバッラブ・アグラワール

所 リーンガス

時 1946年6月20日

同志諸君

私にこの集会の議長を務めるようにと最初の提案が出されたとき、たいへんに躊躇した。いまでも、私はこの気持から解放されていない。なにかの重荷に押しつぶされている感じである。誰かがこの集会の議長をしてくれるならば、私は駆けずり廻って自分の仕事をしたい。それでも、これまで私は指示に従うことを学んできた。いつも何か仕事をしているというのが私の習慣となっているが、おそらく、私が限りなく敬愛するタークル・デーシュラージ氏が私に2～3時間黙って坐っている機会を与えていたいと望んでいるのだろう。⁽¹⁾ タークル・サーハブの指示を私は逃れることはできない。

タークル・デーシュラージ氏の人柄には引きつけるものがある。しかし、私は彼に引かれる特別の理由がある。ジャイプルの外で、どれだけの機会に私は誇りをもって仲間達に、ラージプターナーには独特の素晴らしいことがあると言ってきただろうか。ラージプターナーの一般の人達には、英領インドの人達に比べて活動力がある。ラージプターナーの農民はいまでも男らしい勇気を持っている。メーワールの何十万人ものビール農民、マールワール、ビーカーネール、そして、私自身のジャイプル藩王国のジャート、ミーナー、アヒール、グージャル、ラージプート、そしてカーヤムカーニー農民、⁽²⁾ それから、アルワルのジャートとメオ、これらのジャーティーはいま農業で生活をしており、彼らの状態が悪くなっていることも事実である。彼らを愚か者、田舎者などと呼ぼうとも、彼らには偉大で圧倒的な力がある。機会が来れば、彼らは広大な土地を守ることもできるし、その土地を富で豊かにすることもできる。タークル・デーシュラージ氏は一時代まえにこのような信念を自分のものとし、この力を知って自分の道を選んだ。私

がラージプターとジャイプルの農民を誇りをもって語るとき、私の気持ちはこれらのジャーティーに引き寄せられている。

1. ジャイプル藩王国の農民運動

バールドーリー（グジャラート）の農民の名は現代の歴史において有名になった。⁽³⁾ 彼らは外国政府の残酷な力と闘った。しかし、過去100年間インドの多くの州でこのような何十という農民闘争があったことを我々は良く知っている。指導者もなく、政治組織もなく、農民は立ち上がり、勇敢に抑圧と対決した。我が藩王国においても、政治のABCを知らないシーカルとシェーカーワーティーのジャート農民が強力な運動を展開した。ジャイシンプラー、クーリー、クーダンなどの村の事件は血に染められている。このような事件を思い起こすとき、私はこうした闘争で犠牲になった勇敢な農民にたいする尊敬の気持ちで頭が下がる思いである。ジャイプルの政治生活、ジャイプルの広汎な人民の目覚めはこれら農民のお陰である。1936年にジャイプルの輝かしい将来の基礎が人民会議の成立によって据えられる以前、1931～32年、そしてそれ以前にシーカル、⁽⁴⁾ カンデーラーワーティー、そしてシェーカーワーティー⁽⁵⁾ の農民は運動に投じていた。同様に、メーワールと近くの藩王国の政治生活もビジョウリヤーの農民運動のお陰である。

ジャイプル藩王国人民会議の成立以前に、シーカルとシェーカーワーティーの農民は土地査定についての自分達の要求を認めさせた。ジャイプル藩王国のこの地域は、ティカーネーダールが完全に支配しており、彼らは決して「国」（=藩王国）の支配に従うことを認めなかった。この地域で土地査定を行わせることによってどれだけ大きな成果を上げ、どのように厳しい闘いを勝ちとったかは、今日正しく評価されず、この闘争はほとんど忘れ去られている。しかし、事実は、その闘争に比べると、この10年間、農民のために何もなされてこなかったということである。

この闘争の指導者達は外の世界についてなんら正しい知識を持っていなかった。外とのかかわりは、わざかにタークル・デーシュラージ氏と彼の同志達を通じて

存在した。指導者達はたんに自分達の地域の力でなすべきことをしたのである。彼らには政治的操作や戦略もわからなかった。彼らの手作りの強力な武器、ジャート農民組合が彼らの手から奪われ、解体されたこと以上に悲しいことはない。⁽⁶⁾やがて、農民運動は眼をくらませる光のなかに投げ入れられたのである。

シーカル、シェーカーワーティーの農民組織は、藩王国全体に拡大されるべきであった。自分達の地域の大きな問題を解決したあとで、農民指導者と活動家はカンデーラーワーティーや藩王国の他の郡の農民のことを考えるべきであった。彼らの経験と勇気、そして彼らの組織の援助は、ジャイプル藩王国の他の地域の数百万人の農民に必要であった。しかし、彼らは警戒を緩めて満足してしまうか、にせ金を本物として見せられる迷路に多くの者が入りこんでしまった。自分の眞の姿を忘れ、他人の偽りの輝きに魅せられたのである。純粹な農民運動を捨て、全世界の解放者になりたいという欲望も何人かの農民活動家の心に入りこんだ。彼らの行く手にある誘惑は大きく、あるいは、闘争に疲れて他人の支えなしには立っていることもできないほど気力を失った。それぞれの人について事情が異なることはたしかであるが、全体として、これによって農民の組織と活動に大きな打撃が加えられたのである。

農民組織が崩壊しても農民の力は無くならない。農民の力を水に流して連れ去ることはできないし、空を飛んでどこかに行くこともない。農民が過去10年間にどれだけ前進したかについて述べたい。過去10年間にジャイプルで獲得した政治的成果の主たる貢献者が農民であることは、議論の余地がない。あるいは、成果は農民の力で達成されたというべきであろう。農民を絵のなかから外せば、薄い下書きと無様な色が残るだけである。

1939年にジャイプル藩王国で、書き、話し、結社を作る自由を求めてサティヤーグラハが行われた。「サティヤーグラハ」の名における闘争形態がインドで拡まっているが、そこには闘争を開始する可能性とこれを回避する可能性とが存在する。ジャイプル・サティヤーグラハについても同じ事が起こった。おそらく、指導者達は闘争の回避を考えていた。ジャイプル藩王国人民会議の運営委員会のメンバーが一度に逮捕された1939年2月11日まで、誰もサティヤーグラハを行う用意はなかった。のちに、ジャイプル市で行われたサティヤーグラハでは、B.S.デーシュ

バーンデーの指導の下に私の同志ドゥルガーラルジー、それに、私と別の仲間がその任に当たっていた。初めのうちは、いつか我慢しきれなくなるのではという絶望的状況であった。まもなく、市の状況は少し良くなった。だが、実際には、シェーカーワーティーからやって来た農民のグループが活動を支えたのである。すると、我々の力は無限に思え始めた。このサティヤーグラハにおいて大部分の攻撃は農民に向けられた。騎馬警察が農民を襲った。農民は傷ついた。市街ではデモのようなものが起こっていた。カルカッタとボンベイの金持ち達が3万8千ルピーの援助をして來たが、私の推測ではそのうちの3万ルピー以上がアーグラーの事務所で消え失せてしまった。⁽⁷⁾ ジャイプル藩王国で達成された成果は農民の血によって成し遂げられたものであり、そこではお金はほんのわずかしか使われなかつた。

過去のこの闘争、そして来るべき闘争において都市住民がどのような役割を果たすかは、集会の演壇でチョウダリー・ガーシーラーム氏が話した出来事で推測することができる。彼の話によると、彼と彼の同志が晝は森のなかを駆けめぐり、夜はジュンジュヌーの町に宣伝に來るという闘争の時期があった。彼の一人の同志ラードゥーラームー私の記憶ではこのように名前を言ったと思うーがその活動の一環としてある高利貸の家に行った。高利貸はラードゥーラームジーの顔を平手打ちして、次のように言った。⁽⁸⁾

「君は自分自身を侮辱してしまった。そして、いま、我々を侮辱するために歩き廻っている。」

この出来事に言及して、農民もまたこのようにたんに自分の利益の立場で考えるべきだと言おうとしているのでは決してない。農民は、いまでも寒さ、暑さ、雨、日差し、暴力、罵声、様々な屈辱に耐えながら土を碎き、穀物を生産し、すべての者を養っている。何をもしながら自分は腹半分しか食べられず、すりきれた布をまとめて満足している農民が、どうして利己的であろうか。だが、心の広さだけで物事は進むだろうか。農民の力ですべてが進もうとしているとき、何故彼らは手綱を他人の手に握られ、指図されるままに歩むしがらみに結びつけられているのか。

2. インドの独立と社会主義

ジャイプル藩王国の農民が今後どのように前進するかについて自分の考えを話すまえに、しばらくインド内外の情勢について触れておきたい。いまや、インドの独立は戸口の所まで来ている。政治的独立という我々の目標は手を伸ばせば届く距離にある。インドは外国の支配から解放されるだろう。足枷から解き放されるだろう。いまや、我々は足を前に進めることができるだろう。過去60年、会議派の旗の下にインドは独立に向けて進んできた。いまその闘いは終わろうとしている。イギリス支配者はインドを去って行くだろう。インドの多くの政党の不満は、イギリスが眞の独立と言えない状態でインドを去るのではないかということである。彼らによれば、ラージャー、マハーラージャは今まで同様に維持される。ムスリム多数居住地域とヒンドゥー多数地域の争いは残るだろう。インドはイギリスの工業の影響下になんらかの形で縛られる。しかし、私にとって不思議なのは、何故インド人の心にこのような疑いや怖れがあるのかである。外国権力が自分の荷物を仕末してこの国から出て行くのに、これ以上の何を彼らに求めるのか。外国権力にもうしばらくインドに居てもらい、我々インド人同士の争いを解決してもらおうというのか。我々の行く手を妨げるために外国権力がインドにいらないという以上に良いことがあろうか。ラージャー達とは我々は自分で問題を処理する。すべてがインドの地域となり、我々がそこにいる。正義・分別・善意によって、我々はヒンドゥー州、ムスリム州の問題を解決できるだろう。資本主義と封建制の問題もインド人民が解決するだろう。

多くの人の心配は、イギリスがこの国から去ればインドのすべての悲しみが拭われると思っている所から来ている。しかし、それは錯覚である。ともあれ、イギリス支配が排除されれば、我々の頭の上の重石は除かれる。我々は健康で身軽になる。

しかし、単なる政治的独立だけでは社会的病弊を癒すことはできない。アメリカとイギリスは数世紀にわたり独立を味わっている。アメリカの億万長者はアメリカの農民を搾取していないのか。独立したイギリスが世界をどれだけ苦しめたか、我々は皆知っている。国家が富裕な階級の手中にあるような独立は、一般大

衆を幸福にすることはできない。金持ちは権力は自國の大衆を搾取し、他國に貪欲な眼を向ける。インドにとっての良い時代は、社會主義が成立したときに訪れる。インドが外國支配と闘っているとき、インドの農民と労働者はこのように言われた。「我々は外國と闘っているのだ。君達は自分の問題を持ち出さな。皆、團結して闘おう」と。皆が團結しては闘わなかった。金持ちは利潤の減少を決して認めなかつた。他方、農民と労働者は独立のためにあらゆる犠牲を払い、飢えにも耐えた。母や父は闘いのなかで死に、子供は飢えで泣き叫んだ。60年ののち、独立は近くなつた。しかし、独立は誰のものか。外國資本・資本家の手から、インドを搾取する権力は奪い取られた。しかし、その権力は自國の富裕な階級の手に握られようとしている。

インドに社會主義が成立しない限り、インド人の勤労によって得た物が金持ちの金庫、そして彼らの銀行に入していくのを誰が止めることができるのか。独立闘争を指導してきた會議派の指導者達が、金持ちによる一般大衆、労働者、農民の搾取をゆるさないだろうといわれている。しかし、それははかない夢である。社会の枠組みが変わらない限り、勤労人民が生産物を管理し、いかなる者も他人のかせぎの分け前に与ることができないようにしない限り、搾取は終わらない。法律を作る権限が労働する農民・労働者の手中に入らない限り、誰がそれを認めようか。指導者達がこのことを信じているのならば、彼らは社會主義の闘いを展開できる。この闘いは世界の被搾取者・勤労者・労働者・農民の運動と結合してこそ展開できる。社會主義の闘いは、皆が一つになって闘うことはできない。この闘いは農民と労働者が闘わなければならぬのである。

イギリスにチャーチル政権がある限り、我々は、独立のためにこれからどれだけの闘争をしなければならないかわからなかつた。第二次世界大戦において、イギリスを防衛したのはイギリスの農民と労働者であった。労働者は工場で軍事物資、弾丸・爆薬・飛行機・タンクを作り、若い息子達を軍隊で戦うために送つた。同様に、イギリスや他の國の農民は軍隊のために食糧を用意し、國の独立の戦士を送つた。その結果、戦いが終わると國の指導権は労働党の手中に入った。労働者のストライキを行うために、そして労働者の要求のために闘うことによって生活のすべてを捧げた人達が、第二次世界大戦に勝利し、今日統治を行つてゐる。

イギリスの労働党は、20年前からインドの独立を要求してきた。いまや、彼らはその約束を果たそうとしている。社会主義政権下でない国の指導者達は、苦しみながら歩んでいる。そこで多少とも改革が行われたのは、世界が社会主義に向かっているという怖れからであった。アメリカでも同様である。アメリカでは、200万人から250万人の鉄道労働者が賃上げの要求をし、言葉に疲れたとき、ゼネストの決定をした。⁽⁹⁾ アメリカ政府のトルーマン大統領は、鉄道労働者にありとあらゆる汚名をなすりつけた。彼は怖れてもいた。労働者にたいして、私は軍隊に命令して鉄道を占拠させると言った。結局、トルーマン氏は屈服した。賃金を上げる声明を出さなければならなかつた。

世界は急速に社会主義の方向に向かっている。前の世界大戦まで、ロシアの状態はまったくインドのようであった。ロシア人は、ロシアの金持ちの圧迫と搾取に打ちひしがれていた。皇帝ツァー、貴族、そして富裕な階級が全人民を収奪していた。ロシアの人民は反乱を起こした。ロシアの農民・労働者・兵士は団結して、ツァーと富裕な階級の権力の座をひっくり返した。全財産、工場・宮殿・銀行・鉄道・鉱山・国のすべての資金を労働者・農民のパンチャーヤト（自治権力）が管理した。所有者もいなければ、奴隸もいない。世界で初めて真の自由がロシアで得られた。一人の人間が他の何千人の人間を働かせ、彼らのかせぎを一人占めする限り、新聞の所有者が豊かな自分と自分のグループを宣伝し、人々の眼をくらませることができる限り、大量の資金を使って選挙に勝つことができる限り、一般大衆は自分の労働から完全に利益を得ることはできない。生きて、機械のように働くだけの賃金が分け前として与えられる。人間は、金持ちの金庫が一杯になるように、彼らの太鼓腹が膨れ上がるよう、骨を碎いて働いている。一方で、金持ちは他人のかせぎでぜいたくな生活を送り、他方で、労働者は、金持しが天国に行く通路に汗とともに自尊心、生活上のあらゆる楽しい夢、そしてお金を落とす。この状態が続く限り、貧しい労働者・農民にとって世界は地獄である。ロシアの地獄は、いまから29年前に天国となった。ロシアでは、人は自由の息を吸い、自分の労働のかせぎを自分で享受している。農地と工場の生産はロシア人の必要を満たすために行われている。生産は何十倍も増大し、人民の幸福・豊かさも何十倍も増大した。100人中5人から10人の金持ちの権力、彼らの宮殿、

そして銀行が奪い取られた。その結果、いまや、ロシアでは100人中100人にとって天国である。

ロシアの人達のこの幸福は、ひとたびはすべての金持ちの敵となった。彼らは、集会を開き、労働者と農民の組織を作り、思想を表現する自由があれば、金持ちの権力は消滅すると理解した。ドイツ、イタリア、スペインと日本でこのようなすべての自由が抑えつけられた。社会主义運動を弾圧するために金持ちは莫大な金を使った。貧しい者、失業に苦しむ多くの者に給料を与えて、彼らの私兵を作った。なんとかして権力の座に就き、名声を得たいという夢の実現を望むのらりくらりの考えの指導者達が、これらの金持ちの汚れた残り物で生きた。このような指導者達はお金が頼りである。彼らは金持ちから好きなだけ金を手に入れた。金持ちとこれらの指導者が共同して人民を欺くのに成功した。どんな結果となつたかは、皆よく知っている。一般大衆は、動物のような生活を送り、略奪者達の工場で大量に商品を製造した。国内の貧しい一般大衆はこの商品をどうして買うことができようか。そこで、この商品を他国で売って儲けるために、他国を強奪しようとする欲望が増大した。強盗のような指導者と権力を握る富裕な階級にそそのかされて、ドイツとイタリアの人民はヨーロッパの隣国、そして労働者・農民の国家ロシアを攻撃した。

戦争の恐るべき結果を、貧しい者も味わなければならなかつた。過去5～6年間、ヨーロッパの人達は、夜寝るとき、翌朝生きて起きられるかわからないと心配していた。空からは爆弾の雨が降り、都市という都市が破壊された。破壊はドイツやイタリアでも起こり、ヨーロッパの他のすべての国でも起こつた。しかし、これほどの犠牲は無駄ではなかつた。世界の眼が開かれた。一般大衆は、金持ちの略奪者の権力が国の利益を訴えながら、自分達をどのように破滅の道に導いたかを目撃し、理解した。侵略者達の国家では、社会主义の敵ファシズムはなくなつた。他の国でも、ひそかにドイツ・イタリア・スペイン・日本のファシズムを援助し、機会あらば自国でも人民のあらゆる自由を抑圧することを計画している政府や集団はなくなつた。

社会主义の波は、ヨーロッパの多くの国に届いた。絶望、敗北主義、不況に伴う失業、貧しさに敗けて、人々は道を忘れていた。金持ちが作り出した幻影のな

かで、彼らは何年も眼をつむって汗と血を流していた。6年の戦争ののち、いまや地図が変わった。現在、世界では二種類の人達のあいだで綱引きが行われている。一方では、人はこう言っている。改革は徐々にすべきだ。さもなければ富裕な階級がまた騒ぎを起こし、戦争が始まると。他方、世界の社会主義運動の指導者ロシアと他の社会主義の指導者達は、人民が後戻りして、あれほどの犠牲を払って打ち破ったわなにふたたびはまることはあり得ないと言っている。社会主義の早期の完全な樹立が人類の幸福の唯一の道である。すべての国は、社会主義の方向に進むか、資本主義の支配を認めるかである。中間の道はない。

今度の戦争でドイツとイタリアの独裁者の支配下にあったヨーロッパの国々において、社会主義政党が今日もっとも強力な勢力である。これらの国々の人民は、勤労農民と労働者だけが国の独立のために献身し、犠牲を払うことができることを良く理解している。それ故、平時に国を幸福にし、豊かにする能力を持つのも農民と労働者であり、彼らこそ自国の運命の創造者である。

3. 中国とインド

ヨーロッパのこれらの国々とロシアを除いても、今日、世界の広汎な地域で、書き、考えを表わし、農民と労働者の結社を作る自由がある。毎日の出来事が、この地域でも急速に社会主義が支配しつつあることを物語っている。闘いは、いまでも富裕な階級が農民と労働者の組織に様々な妨害を企てている地域で起こるだろう。主要な政党が社会主義をプログラムとして承認していない国、労働者と農民の組織が強力でない国では、権力はいまぐるに富裕な階級の手に握られるだろう。

中国とインドは地球上の二つのもっとも大きな国である。両国とも、これから5年間に社会主義と資本主義の闘争が強まるだろう。中国は、10年の絶えざる闘争ののち、日本帝国主義から解放されたばかりである。そして、インドもイギリス帝国の支配から自由になろうとしている。中国北部の1億の人達は現在でも社会主義の影響下にある。1億人の住むこの地域では、社会制度は完全な社会主義ではないが、ほぼ社会主義的である。そこでは、地主や高利貸が農民の血を吸

うこととはできない。そこでは、銀行や金銀投機業者の富はない。小作料は大幅に削減された。中国の他の地域のように、そこでは軍隊が畠の収穫物を略奪することはしない。共産党の影響下にパンチャーヤトの支配がある。正規軍、ゲリラを合わせて200万人の農民の息子達が共産党の指導下に武器を装備して戦う用意がある。この地域の人民を指導しているのは、農民大衆のような生活をし、大きな軍隊をも指揮できる指導者である。1億の人民の指導者、毛沢東は自分の国外に出たことがない。しかし、外国の著名なジャーナリスト達は、毛沢東が偉大な学者であり、思想家であることを認めている。彼と、共産党の軍隊の司令官、朱徳将軍の軍隊指揮能力の優秀さは世界の認める所である。この二人の指導者は普通の農民の服装をしている。

現在、中国の中央政府を支配しているのは、金持ちと封建階級である。アメリカはこの政府をあらゆる形で援助している。中国北部の勢力の増大を喰い止めようと努力している。中国では、すべての政党が団結し、書き、考えを表わし、人の組織を作る自由が認められることになるか、さもなければ、闘争が展開され、その後に中国の農民と労働者は社会主義を樹立して安堵の息を吸うだろう。状況はインドでも同じである。イギリス支配から解放されたインドの労働者階級は自分の行く手に立ちはだかるいかなる障害にも我慢しないだろう。

ここで一つの誤解を取り除いておきたい。労働者の意味は、単に工場で働いている者だけではない。労働をして自分の家族の胃袋を満たす者すべてが労働者である。畠で仕事をしていても、あるいは工場で仕事をしても労働者である。インドの勤労人民は、自分の労働による成果をすべて自分に吸収できるような時代の到来を待ち望んでいる。これが可能となるのは、あらゆる種類の勤労の成果が、ペンによるものであろうと、畠での労働によるものであろうとも等しく得られるべきだと認められたときである。また、国防のために戦う者の地位は両者よりも上にならなければならない。しかし、労働者の勤労の価値がこれほど高くなったり、金持ちはどのようにして生き残るか。金持ちは誰か他の者のかせぎの一部を奪って生きているのである。それ故、インドの富裕な階級がインドの農民と労働者のこの要求を認めることはあり得ない。労働者の進むべき道は闘争以外にはない。

もう一つのことがある。他のことを理解するまえに、我々はそれを理解する必要がある。富裕な階級は自分の肉体的な力に頼るわけにはいかない。しかし、いまや、農民と労働者の息子達が兵士であるような軍隊が、労働者と農民の増大する力を抑圧できると信じてもいい。それ故、富裕な階級は他の手段で目的を達成しようとする。彼らは農民と労働者を惑わせ、その組織を破壊し、さらに幻想に取りつかせるために全力を尽くすだろう。彼らの新聞、そして他の宣伝手段を通して、インドの多くの知識人がこの憎むべき臆病な仕事で彼らを助けるだろう。それ故、我々はこのことに最大限の注意を払わなければならぬ。

インドの農民と労働者は無政府状態を良いと思っていない。彼らが無政府状態を望むならば、そのような状態が生まれるのに時間はかかる。しかし、無政府状態は誰の利益にもならない。100人中90人が勤労農民と労働者であれば、どうして無政府状態を望むだろう。それによって、彼らの世界は悲しみに満ちたものとなる。農民と労働者が望んでいるのは正義を基礎とした社会制度である。すべての者が幸福な社会である。すべての者が自分の勤労の成果を享受し、すべての者が前進し、自分の子供達に能力を身につけさせる機会が得られることである。農民と労働者が自分の運命の創造者となるとき、すべての者が幸福となることができる。農民と労働者が自分の目標を自分の組織を通して平和的に達成することができれば、これ以上の幸せはない。しかし、自分の利益に損害を蒙る者はそれをゆるさない。そのときには、勤労人民は自分の目標のために闘わなければならぬ。勤労人民が勝利することは疑いない。ロシアの革命家達に反対して、世界の富裕な階級、ヨーロッパの列強が軍隊を送った。今日、インドの勤労人民にこのような怖れはない。インドにおける社会主義への道ははるかに容易である。

4. ジャイプル藩王国農民組合の必要性

私が以上の問題にこれだけ時間を割いたのは、我々は眼を閉じて進むことはできないからである。ラージヤスターとジャイプルの農民は、自分がどちらに向かうか考えて進まなければならぬ。インドが他の世界から取り残されまいとすれば、インドの農民もまた前に進まなければならぬ。前進できる者とは、みず

からの力を信じて歩む者であり、他人に頼り、他人に支えられて歩むことはやめなければならない。自信、自力への信頼こそが人を正しい道に導く。ラージャスタンとジャイプルの農民は、時代と共に歩まなければならぬ。正確にいえば、時代を変えなければならぬ。私は、ラージプタナーの農民が時代を変えるうえで重要な役割を果たすと信じている。

インド全域に農民組合の組織がある。同じように、ラージプタナーにおける強固な農民組合の結成が農民にとっての王道である。自分達のこの意図を検討するうえで二つの試金石がある。第一に、農民が自分の労働の成果の完全な享受を望んでいることであり、第二に、農民の社会的・政治的地位が誰に比べても軽くあってはならないことである。

現在の制度の下では、労働によって生活しているすべてのジャーティー、すなわち、ジャート、ラージプート、ミーナー、アヒール、グージャル、マーリー、ムスリム、あるいは他のさらに「低い」仕事をしているチャマール、バラーラー、コーリー、メタルなどは、他の者が自分達を支配するためのこの世に生まれたというような生活を送っている。すべての「高い」地位には、官職であれ、商業・ビジネスであれ、バニヤー商人、ブラーフマン、その他のいくつかのジャーティーの人達が就いている。資本主義、金持ちの権力がある限り、この状態は続く。労働によって生きるジャーティーが組織されない限り、同じ人達が議会に入り、彼らの政府が成立し、軍隊も彼らの配下にある。今日でも、もしも英領インドの州の閣僚名簿、議員名簿を見れば、このことが証明される。ラージプートが自分達の氏族の伝統をどれだけ誇ろうとも、彼らは今日の制度の下ではお金に支配されており、自分達の貧しさを頭を垂れて認めなければならない。

農民組合は労働によって生きるすべてのジャーティーを結集しなければならない。肉体労働の価値が高くならない限り、農民と労働者の社会的地位は高まらない。一人の農民が1年に100マウンドの穀物を生産すると仮定しよう。100マウンドすべてが農民のもとに残ってしまえば、労働の成果を彼の家族は得ることができない。労働の成果は現在、お金、ルピーに結びつけられている。100マウンドの穀物の値段は200ルピーかもしれないし、800ルピーかもしれない。しかし、200ルピーで満たされる筈の生活上の必要に800ルピーかかるとすれば、たとえ生産

物の価格として800ルピーを得たとしても農民には何の得にもならない。要は、8時間畑で労働している者は、役所に8時間坐っている大臣、あるいは大工場の経営者と同じだけの収入をえなければならぬということである。もしも相違があるとすれば、人それぞれの仕事で生活の必要を満たすことができるということでなければならない。例を挙げよう。役所の税務部の職員が月給80ルピーで仕事を始め、税務局長となって800ルピーを得るようになったとすれば、畑の仕事でも同じ額を産み出す余地がなければならない。少なくとも、すべての勤労者は、家族がまともで幸福な生活を送れるような収入を得なければならない。

これはまったくの想像ではない。世界の5分の1を占めるロシアでは、これが完全に実現している。他の多くの国が急速にこの理想に向かって進んでいる。社会主義だけが人間の生活をこの高い水準にまで引き上げることができる、と繰返し言っても不当ではなかろう。生産を増大し、社会のすべての人達に適切に分配したときに、人々の生活は高い水準のものとなる。金持ちは自分に利潤が多く手に入る物を生産するために資本を投下する。人々の必要とするものが何かを考えない。また、肉体労働の価値を引き下げるによって、金持ちは生産意欲を維持する。布1ターンにつき、工場主が10ルピーを得て、2ルピーの労賃を払えば、彼のポケットに8ルピー残る。¹⁰ 農業でかせぎが多ければ、誰が工場へ労働しに出かけるか。農業の進歩と工場労働の進歩は同時でなければならない。統治者が生産のあらゆる手段を用いて、必要なだけの資本を投げる権利を持たなければ、農業の進歩と工場生産の増大はどのようにして可能となるか。統治の主導権が農民と労働者の手に握られたとき、立派な生産計画が可能となる。それまでは、可能なことではない。

ラージャスターとジャイプルの農民がこの理想に到達するのにどれだけの時間を費やすかは、インド全体の農民組織にかかっている。ラージャスターとジャイプルの農民は、将来、積極的に前に出て、自分の能力を存分に發揮することを誓わなければならない。政治活動の古いやり方を農民は変えなければならない。ジャイプルとラージプターの他の藩王国で社会全体を前進させるために農民が払った犠牲を後悔する必要はない。それはすべて誇るべき歴史である。しかし、将来のために、農民は自分の組織、農民組織を独自に強化する決意をしなければ

ならない。だが、農民を指導する権利が人民会議の手中に入ったことによって、10年間、農民は前に進めなかつた。政治生活への農民の貢献により市民的自由は得られたが、農民は変わらなかつた。農民の状態が改善されるどころか、彼らの問題は表面に出なかつた。すべての階級から成る雑多な組織の常として、人民会議の活動状況は緩慢になつた。このような組織によって農民活動がうまく行く筈はない。責任政府が成立すれば、まったく前に動かなくなる。しかし、ぴかぴかの責任政府ができたとしてもどうなるか。5人の閣僚が誕生したところで、農民大衆の幸福はどうなるか。老朽化した制度を根こそぎ取り除くことによってのみ、社会全体の仕組みが変わる。この任務を人民会議は果すことができない。労働によって生きるジャーティーが農民組合に組織されることによって、この任務は達成される。多くの仲間達が、いまはその時ではないと言つてゐる。私は尋ねたい。遅らせることによってどんな利益があるのかと。

ラージプターのすべての主な藩王国で農民組合の枠組みができた。それを実現し、定められた規約によって組織化する仕事を早急に始めなければならない。農民組合で活動するために進んで集まつた活動家達が、過去数カ月、会合を開いて意見を交換している。農民組合の活動の開始を遅らせようという、その理由が私にはわからない。

農民組合の組織化によって、ラージプターの藩王国では、人民の力が一年のうちに少なくとも5倍になると私は確信している。何十万という農民が現在まで政治に無関心である。彼らには、人民会議は水晶でできた宮殿に見える。にわかに宮殿に足を踏み入れる勇気はない。何十万という農民の家族の生活は現在まで人間らしいものではなかつた。マーワールのビール、我が藩王国、そして他の藩王国のミーナーの送つてゐる生活を何というべきか。農耕部族である彼らは「犯罪部族」にさせられてしまった。一般的に、ムスリムとラージプート農民は今まで他の農民から切り離された。農民に反対する勢力が彼らから力を得てゐる。畑で仕事をする何十万という農業労働者の問題を、現在、誰も取り上げていない。農民組合はこれらすべての問題を解決しなければならない。いかなるジャーティーの農民も、すべて結集しなければならない。

過去20年の農民運動はジャイプル藩王国に非常に有能な農民活動家を生み出し

た。このように有能で経験に富んだ活動家の手中にジャイプル藩王国農民組合の指導権が渡ることは、たしかに、輝かしい将来のあかしである。彼らの活動領域はこれまで極めて限られていた。いまや、農民組合を組織するために藩王国全体を活動領域とすることになる。彼らの能力は存分に発揮されよう。シェーカーワーティー、シーカル、そして、若干のカンデーラーワーティー、トーンラーワーティーの農民が目覚めている。彼らは自分の力を知り、大小の闘争に参加した。この地域では活動の路線を決めることが残されている。他のことは容易である。しかし、藩王国の他の地域では、現在、農民はまったく知識を持っていない。彼らは外の世界についての知識を持たない。政治との接触が現在まで行われていない。それ故、成長しつつあるこれら地域の農民同志、農民活動家にたいする藩王国の他の農民階級のひそかな願いは、「声なき者、声を上げる。足の不自由な者、山を越える」である。

ジャイプル藩王国農民組合はこの呼びかけを承認しなければならない。藩王国全体の農業の進歩がない限り、藩王国全体の農民の社会的・政治的地位が高まらない限り、一地域の農民の生活は幸福で安らかになることはできない。

今まで、農民はたえず闘わなければならなかつた。土地査定のような問題をめぐっては農民は血を流した。現在の世代の農民の生活はこの争いのなかで過ぎ行くのだろうか。私は、書き、話し、考えを表わし、組織する自由が非常に大きな力になると思う。農民組合がこの力を活用すれば、誰が農民組合のプログラムを妨害する勇気を持つだろうか。何百万人でなくとも、50万人の農民が農民組合に参加するならば、誰が「猫の口を抑える」ことができようか。

5. ジャイプル農民運動の課題

土地にかんする権利について、農民は、国家と彼らのあいだに土地を占拠する者があつてはならないと考えている。何世紀にもわたる古い伝統によって、村のすべての土地について村自体に権利があることは議論の余地がない。国家には地代あるいは地税を徴収する権利がある。しかし、現代において、多数の農民を苦しめるような地税徴収の制度を認めることはできない。ティカーネーダールに、

国家に尽くした奉仕にたいする報償として、あるいは他の理由で地税徵収権が与えられたということは、別問題である。また、この伝来の権利をいつまでティカーネーダールが享受するのか、あるいは、この権利に代えてなんらかの補償をいま与えることが適當であるかどうかとも考えるべきである。当面、農民が強調しているのは、カールサー地（直轄地）に住んでいるにせよ、非直轄地に住んでいるにせよ、同様の権利があり、彼らは地税を直接国家に納めるべきだということである。

ラージプート・ジャーティーの指導者達に言いたい。あなた方の誇りは国防の戦士にある。これ以上の栄誉はないし、この栄誉を勇敢な部族から奪いとることはできない。それでも、2、3の大きな所領を除けば、大部分のティカーネーダールが経済的不安から解放されていないことも苦い真実である。彼らは、自分達に独立した人間にふさわしい生活を送らせることもできないジャーギールにしがみつき、彼らの部族全体の前進の道を妨げている。他のジャーティーの人々と同じように、ラージプート・ジャーティーの多数の人々にとって良き生活手段がないのは、資本主義の呪いの故である。1、2の大邸宅の所有者を支えているのは彼らの収入であり、そのうえに、彼らは恐るべきパルダー（隔離制度）を守っている家族全体を養わなくてはならない。このために、彼らは地代を2倍、4倍、5倍に引き上げ、強制的に徵収し、できるだけ搾り取ろうと躍起になっている。このようなことでは、我々の生活の問題はどうして解決できるだろうか。自分勝手の、不当な行いをして、安楽な生活を送ることはゆるされない。ラージプート・ジャーティーの指導者は眞の道を示してほしい。独立を迎えるこの時期に、保持することもできない既得権のために争いを拡大することは、先見の明とはいえない。彼らは、自分のジャーティーの人達にたいし、偉大な戦士の理想に向かって前進するように訴え、お金のために頭を下げることのないよう教えてもらいたい。農民と団結して社会を変える事業に参加し、ごく普通のラージプートの生活を幸せにしてほしい。

単に土地の査定を実施することによって土地からお金が出てくると考えている人がいるとすれば、彼らに丁重に言いたい。農民問題の勉強がたりないと。カールサー村落で土地査定を行って10年以上になるが、そこでの農民の状態は悲惨で

ある。シェーカーワーティー、シーカル、トーラーワーティーの農民よりもはるかに重い負債が、ヒンダオン、ガンガープル、サワーイー・マードーブル、ダオサー、マールプラー、サワーイ・ジャイプル、そしてフレーラー地域の農民にのしかかっている。何万もの農家には4～5ビーガー以上の耕地がなく、その大部分の家には牛がない。⁽¹¹⁾ 一頭の牛のために、彼らは農地の半分を差し出さなければならぬ。第二次世界大戦前、20～25セールの穀物が1ルピーで売られていたとき、こうした農民は2ヶ月も腹半分の食事で過ごさなければならなかつた。⁽¹²⁾ 農民組合が農業発展の広汎な問題をみずから掌握し、これらの地域を潤い豊かにしなければならない。農民の乾き切った生活のつる草に縁を取り戻さなければならぬ。今日、カールサー地域の農民を遠くから一望するとき、彼らが生きているのか、死んでいるのかわからないほどである。⁽¹³⁾

灌漑を整備し、農民の負債を軽くし、わずかな利子で長期に借り入れる制度を準備し、家畜を増やし、未灌漑地を灌漑地に変え、科学的な方法によって仕事をして生産を増大するなど、これらすべての事業にジャイプル政府が、今後5カ年、2億ルピーの費用を投するならば、1951年に農家の平均支出は少なくとも月100ルピーとなるだろう。これまでの慣行にただ従っている者は、こうした可能性をおそらく信じないだろう。しかし、農民組合が計画を立てて活動するならば、いかなる政府も従わざるをえないだろう。

農業改革のための資金投入とともに、政府はもう一つの方向で前に進まなければならない。増大する生産の利益を農民が得ることができるのは、生産物価格が高く据えられたときである。生産物価格を高く決めると同時に、藩王国内で全体として労賃と公務員の給料も高くすることが必要である。もしも、農民が政府に十分な代表を送ることができず、政府の主導権が保守的な人達に握られているならば、この問題での闘争が必至となる。一方で、農民組合が、責任政府であれ、どんな政府であれ、農業改革の計画で政府に協力できる場合には、生産物価格、労賃、給料を増大する問題で黙っていることはできない。農民の生活水準を高めるには、社会全体がともに前進することが必要である。社会の一部でも遅れていれば、多数の農民がどうして幸福になれるだろうか。

資本主義を終わらせたくない政党の態度は、この点で進歩的ではない。彼らは

現在の経済制度が搖ぶられるのを怖れている。給料を上げることを躊躇し、なによりもこの問題を回避する政策を探っている。彼らには革命的な勇気がない。おそらく、このような変革によって経済制度が一層強固になるという理解ができないのである。社会の階級間の均衡はやがて変わる。そして、階級間の、また貧富の差が無くなる。金持ちがいなくなったとしても、90%の人々は失うものがない。農民組合と、資本主義を支持する政党のあいだで、これらの問題をめぐって闘争が始まるだろう。しかし、このような闘争は歓迎すべきである。そこから社会主義が生まれるからである。

社会全体を幸福にし、社会主義を樹立する事業は、農民と労働者の組織だけがなしうることについては、すでに詳しく話した。ジャイプル藩王国農民組合はこの偉大な目的のために力を結集するだろう。

しかし、農民組合は当面の問題にも取組まなければならない。戦争の時期に当たったこの5年間、農民のもとにかなりの現金が入った。だが、将来のための貯えどころか、今まで、農民の負債はほんのわずかしか軽くなっていない。もしも、藩王国に組織的な農民運動が存在していたならば、そのようなことは起こらなかっただろう。

もう一つの問題は、もっと最近の事柄である。ジャイプル政府は住民のためにいかにして食糧を調達するかに苦労している。ところが、農民から穀物を手に入れた段階で、大衆が食糧を求めて叫ばなければならないほどジャイプル藩王国の穀物生産が悪くないことも、政府は知った。しかし、ジャイプル政府は危機の根本原因に打撃を与えることはできなかった。市場で小麦が1ルピーにつき4セールで農民から買い取られた。農民の苦境は、家にいて1ルピーにつき5セールで売れれば、それでも悪くないと思うほどになった。他方、2月（1946年）から政府、そして一般大衆は大商人、投機業者の小麦を1ルピーにつき2.5セール、2.25セール、2セール、あるいはそれ以上に高い値段で買ったのである。農民を欺き、商人に利益を与えるこの政策にどれだけの見識があるのか。我が労働党は、たとえ政府が農民から穀物を手に入れても、二つのことをしなければならないと問題を提起した。一つは、政府はその代わりに農民に譲歩し、農民が市場で1パイヤーで売れる物を半パイヤーで買い取ることのないように措置を講ずることで

ある。

政府が穀物の調達・輸送・配給などに使った1千万ルピーを農民のために使っていたならば、食糧危機は農民の協力によって解決されていただろう。そして、食糧生産の増大によって将来への不安も消えていただろう。たとえ政府がさらに1千万ルピーを農民に長期貸付していたとしても、どんな損失があつただろう。

このやり方を政府は好まず、ジャイプル人民会議は政府にこの方針を採用するように圧力もかけなかった。収穫の前後に農民が何を耐えなければならなかつたか、賄賂と強制がどれほど横行していたかを、政府は自由に調査して知ることができた筈である。

この食糧騒動はなんとか2、3週間すれば収まるだろう。しかし、戦争が作り出した他の困難は、農民にとって依然としてそのままである。農民の消費する大部分の燈油、砂糖、粗糖、衣料は市や町の闇市場に消えてしまった。政府は、農村におけるこれらの物資の配給のために、なんら満足すべき対策を立てていない。政府は穀類の集積所のある場所に衣料を送る計画を立てた。しかし、農民が生涯にわたって養わなければならぬ寄生虫共は手つかずである。各地の現状を私自身聞いている。将来は、農民組合が村落委員会を結成して、村の配給はこの委員会を通して行うように働きかけねばならない。現在でも、村落パンチャーヤトと農民組合の協力によって、これらの物資の配分を適正に行うことができる。

このような問題において農民の意見を汲み上げる者がいなければ、この仕事は農民組合なしにどうして進めることができようか。ジャイプル藩王国農民組合がなければ、どうして進むことができようか。ジャイプル藩王国農民組合が何故必要か。この問い合わせへの答えは現在の農民の状態のなかに存在している。

明日から、我々はジャイプル藩王国農民組合の仕事に携わる。農民の喜びと悲しみにかかわる問題が、毎日のように農民組合のまえに出されるだろう。私はこの視点から詳細に農民のあらゆる問題を語ることはしなかつた。農民組合の普通の活動家として考えていることを提出したまでである。私と諸君すべての任務は、ジャイプル藩王国農民組合が決めることである。我々がともに行動すれば、我々の道はさらに明確になると信じている。

農民組合に勝利を。革命に勝利を。

「訳 註」

- (1) Thakur Desh Raj, バラトプル藩王国出身のジャート。1931年に*Rajasthan Sandesh*の編集長としてアジュメールへ。同年、ラージャスター・ジャート・クシャトリヤ会議を結成し、シーカルとシェーカーワーティーのジャート農民の自覚を促がす (Ram, *op. cit.*, p. 152f.).
- (2) チョウハーン・ラージプート出身のムスリムで、シェーカーワーティーに多く住んでいる (M. A. Sherring, *The Tribes and Castes of Rajasthan*, Delhi, 1987, p. 86) .
- (3) 1928年、地税引き上げに反対してサルダール・バッラブバーイー・パテールによって指導された農民のサティヤーグラハ。
- (4) シーカル・ティカーナー (所領) は、1455.5平方マイル、436ヶ村から成る藩王国のなかの「半独立国家」。土地の約半分は、シーカルのラーオラージャーの直轄地 (カールサー) 、残りの約半分が、小ジャーギールダール (知行地を持つ者) のあいだに分けられており、彼らはすべて、ラージプートである (Ram, *op. cit.*, p. 145).
- (5) シェーカーワーティー地域の土地は、すべて、大小のジャーギールダール (その数は421) に属するが、5大ジャーギールダールが地域の土地の約75%を占める (*Ibid.*, p. 170).
- (6) 正確には、1938年の人民会議運動の再編成によって、多くの農民運動指導者が人民会議に加わり、「責任政府の樹立」に活動の重点を移したため、農民運動は弱まった。シェーカーワーティー・ジャート・農民パンチャーヤト自体は、1949年まで独立して存在した (B. K. Sharma, *Agrarian Movement in India*, Jaipur, 1987, pp. 136-137) .
- (7) アーグラーに設けられたサティヤーグラハの事務所については、アグラワールの回顧でも言及されている (II, p. 154) .
- (8) 「本来の務めを忘れて、ブーフマンのごとく振舞っている」ことへの怒りの表現。なお、原文は、" The to thanki dhul karali, aur ab mhan ki kara ba na phil rahya ho . "

- (9) 1946年5月23日のアメリカの鉄道労働者のゼネスト。
- (10) ターンは生地の長さの単位。0.914 メートル=1ガズ、40ガズ=1ターン。
- (11) 1ビーガー=8分の5エーカー。
- (12) 1セール=0.93キログラム。
- (13) M. S. ジェインは、カールサー地域の農民は、ジャーギールダールの下の農民よりも、(1) 小作料が一定であり、(2) 税課や無償労働から相対的に自由であった点で、条件が良かったと述べている(Jain, *op. cit.*, p. 285).

後記：ラーダバッラブ・アグラワール氏の演説全文を用意してくれた友人のH. G. パント教授、及び生前のアグラワール氏の好意にたいし改めて感謝の気持ちを表わしたい。なお、サブタイトルは、訳者の判断で挿入した。

原文中の不明の部分及びインド暦については、G. C. バクシー教授及び古賀勝郎教授から御教示を得た。

ジャイプル人民会議の一次資料については、1989年3月に、ラージャスター州史料館(ビーカーネール)で読むことができた。

Post-War Image of the World and the Princely State of Jaipur(India)depicted by a Peasant Leader -Speech delivered by Radhavallabh Agrawal on the eve of the birth of the Jaipur State Kisan Sabha(1946)-

Sho Kuwajima

The original text of this Japanese translation is *Ringas Kisan Sammelan, Aasarh Sudi 1, 2003, Sabhapati Shri Radhavallabh ka Abhibhashan*.

This speech was delivered by Radhavallabh Agrawal in a peasant meeting at Ringas(Jaipur State)on June 20th 1946, when the Jaipur State Kisan Sabha(Peasant Union)was just going to start its activities.

His speech is noteworthy in many aspects.

Firstly, in the year of 1946 he became very critical of the policy of the Jaipur Praja Mandal to which he was very closely related. In this speech he clearly concluded that for ten years since the birth or the reorganisation of the Praja Mandal in 1937 the peasants in Jaipur State could not move forwards, though he asserted that the peasants played a prominent part in the Jaipur Satyagraha in 1939. Particularly he regretted the absorption of the Jat Kisan Panchayat into the Jaipur Praja Mandal.

In this connection it is to be noted that in the post-war days of Jaipur not only big Thikanedars but also many small Jagirdars resisted the agrarian reforms, and it led to the non-rent movement by the peasants.

On the other hand, a few leaders of the Praja Mandal were called in as the ministers of the Maharaja's Government. 1946 was a year in transition and this assessment of the situation forced Agrawal to have his critical view of the history and present nature of the Praja Mandal.

It may be due to the same reason that the horizons of the peasant movement with which he had been concerned were no longer limited to Sikar and Shekawati where the Jat Kisans were active, and were expanded to other areas of Rajasthan. The tribal people like Bhils and Minas came into his sight and he also found the importance of the fact that the problems of the agricultural labourers had been neglected. At least the direction of the peasant movement in future was carefully confirmed.

In this perspective he appealed to the Jagirdars, and particularly to the small Jagirdars to come forward according to the call of history and to show their ways which ' were worthy of the spirit of the Warrior *jati* (Rajputs). '

In a sense, the peasant movement in Rajasthan meant another story of the ' Integration of the Indian States. '

This expansion of his idea was not only caused by the internal political

and social conditions in the Princely State of Jaipur, but also by the victory of the anti-Fascist forces in the Second World War. Radhavallabh Agrawal was convinced that the 'peasants and workers' or the toiling masses of the world brought the War to victory and that the world was then moving towards socialism. In this speech he tried to analyze the situation in the various parts of the world covering Britain, Russia, China and the strike of the railway workers in America on May 23, 1946.

His view of the world led to his optimistic understanding that the Labour Government of Britain which had been demanding the independence of India for twenty years was ready to 'pack up their luggages' and to quit India immediately. This view was in marked contrast to that of the Communist Party of India which was more cautious.

The description of Russia in 1946 was rather characterized with a 'fixed' idea though he tried to discuss in detail. Russia, 'first independent country' in the true sense of the word, was, in his mind, the country of Paradise for every Russian (*sau ke sau ke lie swarg*). His image of Russia was limited by the reality of the world including the beginning of the 'cold war', that is, to what extent the people of the world could get the correct knowledge of the Russian people in the middle of 1946.

Once, Russian situation was observed with earnestness in the contemporary historical setting by the Indian people. In 1920's they had a keen interest in the way of solution, how Russian peasants, poor and illiterate, like Indian peasants, can change their destiny. Again in 1930's they were interested in the working of the First Five Year Plan which started in Russia in 1928 as they were not in a position to frame their economic planning under the British rule. These imprints are visible in this speech too. Since the latter half of 1930's the critical view of Russian internal politics as well as her foreign policy including Russo-German Pact and Soviet-Finland War was known in India. On the occasion

of the 8th annual session of the Jaipur Praja Mandal in April 1946, its chairman, Ladu Ram Joshi made his very critical survey of Russian 'imperialist' policy. But, it is doubtless that the victory of Soviet Russia over Nazism strengthened Agrawal's earlier image of Russia.

In this respect the post-war image of China shown in his speech must have aroused the daily feelings of the Indian peasants more effectively. Though his information was based on the limited and well-known sources, what was then moving in China was told in the present tense and as the happenings of this world. 1946 was the year when the film titled *Amar Dr. Kotnis ki Kahani* was on show, which depicted the story of the Indian Medical Mission to China during the Second World War.

When Agrawal discussed the distress that the peasants of Rajasthan were facing, he could talk so freely that he did not hesitate to refer to the *jati* consciousness of the people. According to his view, the urgent task of the Jaipur State Kisan Sabha was to unite all *jatis* against the oppression by the Thikanedars and Jagirdars. However far from the real picture, Agrawal's image of Russia was unmistakably a product of his perception of the problems in his own area of life and activities.

In May and June 1946, the negotiations on the British Cabinet Mission Plan for a Union of India was proceeding, and serious communal riots had not yet occurred in India. This timing of his speech also contributed to his optimistic view of the 'Transfer of Power' and the history of the world.

Formerly, this author translated into Japanese with his introductory remarks the memoirs of Radhavallabh Agrawal, *Jamnalalji Bajaj ka Netritwa*. It was published in two instalments in the publications of the Association of Asian Studies, Osaka University of Foreign Studies in 1983 and 1984. In the memoirs most probably written in 1970's Agrawal

described very vividly Jaipur Satyagraha of 1939 under the leadership of Jamnalal Bajaj. Agrawal himself participated actively in this Satyagraha. However, in his memoirs Agrawal wrote with his consonant tone the thought and activities of Mahatma Gandhi and Jamnalal Bajaj, 'Gandhian capitalist' who was, in his interpretation, completely different from the post-independent 'American-style' capitalists in India. What is common to his speech and his memoirs is his deep attachment to Jaipur and its people.

The name of Radhavallabh Agrawal appears only in one page in *A History of the All India Kisan Sabha* (Calcutta, 1974) written by M. A. Rasul. Agrawal participated in the meeting of the Central Kisan Council which was held in Calcutta from 6th to 11th, August 1951. When we talk of the birth of the All-India Kisan Sabha in 1936, it must be noted that the peasants in the Indian States were not well represented. This speech of Radhavallabh Agrawal is expected to add something to the studies on the history of the peasant movement in India.

I would like to express my thanks to Prof. H. G. Pant who kindly provided me a copy of the speech of Radhavallabh Agrawal. A pleasant meeting with Radhavallabhji in 1977 is still fresh in my memory. He passed away on January 1st, 1984.

I could read the records on the Jaipur Praja Mandal in the Rajasthan State Archives, Bikaner, in March 1989.

In translating Agrawal's speech into Japanese, I could get very useful help from my colleague, Prof Girish Chandra Bakhshi, and had the knowledge of Indian calendar from Prof. Katsuro Koga.